

○調査目的

- ◇義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ◇学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- ◇取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

【全国学力・学習状況調査結果】 実施日 令和7年4月17日(木)

実施教科 国語・算数・理科

《国語》

国語科においては、正答率は、全国・県よりも高い数値を示しました。問題形式では、「短答式」「選択式」において県や全国よりも上回りました。しかしながら領域ごとの正答率においては「情報の扱い方」が、県・全国よりも下回りました。無回答率においては、ほとんどの問題で県・全国よりも低く、しっかりと取り組んでいるものの、漢字の書き取り、記述式の問題において無回答率が高い結果となりました。

観点別では、県・全国に比べて「話すこと・聞くこと」が県・全国より高い結果となった一方、「書くこと」においては正答率が低い結果が見られました。これは長文問題を読み、内容を理解し、自分の考え方が伝わるように、書き方を工夫して解答することの弱さが要因だと考えます。また物語全体の想像力や表現の効果を考えて解答することの弱さを示しています。日々の学習において文章をおおまかに捉え、必要な情報を得るといった力の定着を図る必要があると考えられます。

《算数》

算数科においては、全国・県よりも正答率がとても高い結果となりました。観点別においては、「数と計算」「図形」「測定」「データの活用」「変化と関係」全ての観点で県・全国よりも高い正答率となりました。教科専科による指導の賜物だと考えます。図形の台形の公式や角度の理解については、県・全国よりも上回る結果となりました。しかしながら図形を分割して公式に当てはめて面積を求めるとなると正答率が低い結果となり、本校の課題が明確になりました。

無回答率においては「思考・判断」、「記述式・短答式」においての無回答率が高いことが挙げられます。特に「数と計算」領域において顕著に表れていました。問題を理解し、数の関係性、正確な読み取りの弱さが要因だと考えます。

日々の学習で、プログラミングを活用した学習を取り入れるとともに、児童が受け身の学習にならないように自分で考えたり、友だちと自分の考えを交流したりする取り組みを繰り返す必要があると考えられます。

《理科》

理科においては、正答率が県と同じだったが、全国よりも低い結果となりました。問題形式の正答率では、「短答式」「記述式」とともに県・全国よりも低い結果となりました。領域ごとの正答率では「エネルギー」「生命」の領域で正答率が低い結果となり、「粒子」や「地球」の領域では県・全国よりも正答率が高い結果となりました。

【今後の取り組み】

「全体の見通しを持ち、課題に取り組む」ことに弱みがあることから、課題全体の量を把握し、解決にかかりそうな時間を見積もったり、分かる問題から先に解いたりする「見通しを持つ」ことを授業でも取り入れていきます。具体的には、単元の始めに、全体の見通しを児童と共有します。また、1時間ごとに「本時のめあて」を提示します。「この時間には何が分かれば良いのか」を児童に示すことで、その時間の見通しを持つことをねらいとします。

また、長文問題や、多くの資料を用いた問題から、効率的に情報を読み取り、必要な情報を選ぶ力を伸ばすため、どの教科においても読み解く力の育成をめざした授業づくりをしていきます。時間を意識して取り組む力も重要と感じたため、通常の単元テスト等においても取り組む時間を明確に示し、決められた時間内で課題をやりきる力を伸ばしていきます。

さらなる授業改善としましては、授業後の児童の「ふりかえり」の内容をもとに次時の授業を計画し直す「PDCA サイクル」を意識して教科指導を進めていきます。

また、昨年度から学校での読書活動のあり方を見直し、力を入れているところです。休み時間はもちろん、授業と授業の間の時間や課題が終わった後の時間（隙間時間）にも、一人一冊ずつ手元においてすぐに本を読めるような環境づくりをして本に親しめるように取り組んでいます。

さらに本校の特色でもある「志賀リンピック」「ロング昼休み」を生かし、体力向上やコミュニケーション能力の向上を図るため、体を動かして友だちと元気に遊ぶことも継続し、遊びと読書の両立を目指していきたいと考えます。

【児童質問紙より】

児童質問紙の結果を分析し、本校児童と全国との差が顕著である点について以下に示します。

《学習面》

「平日、1日当たり1時間以上勉強をする割合」では、県・全国に比べて割合が低い結果となりました。

《規範意識》

規則正しい生活面においては、「毎日朝食を食べているか・同じくらいの時間に・就寝しているか」という回答が県・全国よりも低い結果となりました。一方で学校の決まりを守ったり、いじめを絶対に許さないと考えたりする児童の割合が、大変高かったです。

《自己肯定感》

「学校に行くのは楽しいと思いますか」の質問には、「楽しい」と答えた割合が県・全国よりも低い結果となりました。「自分には、よいところがあると思いますか」という回答も県・全国よりも低い割合で「ある」と回答しており、自己肯定感が低い児童が多いことが見られました。

《読書について》

「読書が好き」の回答が県・全国よりも低い結果となりました。隙間時間に読書をするという取り組みだけではなく、「読みたい」と思わせる手立ても必要かと感じ、本校教職員による「本のおすすめカード」を作成し、発達段階に応じた本への出会いを促すよう取り組んでいきます。

《教科について》

国語、算数、理科ともに「好き」「得意」と回答した割合は県・全国に比べて低い結果となり、算数・理科に関しては「役に立つ」と答えた児童も県・全国よりも低い結果となりました。教科の中で理科が「好き」「わかる」の割合が高い結果となりました。好きだと思える授業を行うことにより、学習の理解を深めることができると考えられます。その結果、教科が「好きでわかる・役に立つ」という気持ちになると考えます。

国語の授業で、「違う点や似ている点を意識したり、図で示したりしながら情報を整理しているか」「目的に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して文章を書いていますか」や「目的に応じて説明的な文章を読み、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけていますか」などにおいて県・全国よりも低い割合になり、課題として挙げられます。

算数の授業では、「学習した内容を今後の学習で活用しようとしているか」「学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えているか」などにおいて県・全国よりも低い割合になり、課題として挙げられます。

一方、外国語（英語）活動においては、「好き」「大切」と答えた児童が多い結果となりました。

《ICT を活用した学習状況》

以前から導入された ICT 端末を調べ学習等においては使用する頻度は高く、楽しみながら取り組んだり、自分で調べたりすることに効果的で、「意見交流」に活用するまでには至らなかったということが窺えます。ICT を有効に活用し、自らの学びを深めるために、より良い活用方法を探っていきます。